

ヤツボシシロカミキリ, 兵庫県に産す

小西 和夫¹⁾

兎和野高原にて

筆者は6年前から年に数回、カミキリ撮影のため兎和野高原に通っている。

今年は梅雨の晴れ間を狙って2018年6月17日の12時前、標高650m付近でゴトウヅル（ツルアジサイ）の花を掬い、ヤツボシシロカミキリ *Olenecamptus octopustulatus* を得た（図1）。

スギ・ヒノキの植林地で間伐作業が行われた場所の林縁にミズナラやシデなどの広葉樹林があり、その一角にゴトウヅルが満開の状態だからである。

一掬い目でヒゲジロハナカミキリとともにネットに入ったその特異な姿形に「あっ、タカサゴシロカミキリ！」と初めて見る美しい姿に心が躍った。

帰宅後どうも気になって「日本産カミキリムシ」（東海大学出版会）で確認すると、後頭部の複眼間の白色鱗毛や前胸背板の独立した4つの白色紋等から、「タカサゴシロカミキリ *Olenecamptus formosanus*」ではなく、「異所的に、より高緯度地域に分布する」とされる「ヤツボシシロカミキリ *Olenecamptus octopustulatus*」と判明。

分布は本州（中部）、対馬とされ、寄生植物はズミ、ナナカマド（バラ科）とある。

「人と自然の博物館」に兵庫県内での採集記録を問い合わせたところ、「県内の確たる記録はないようです」とのことで本誌への投稿を薦められた次第である。



図1 ヤツボシシロカミキリ。

兎和野再訪

考えてみればシロカミキリ属 *Olenecamptus* の訪花性は聞いたことがなく、ヒゲジロハナカミキリは花粉にまみれていたが、ヤツボシシロカミキリはきれいでも全く汚れはなかった。しかし成虫が後食するとされるズミやナナカマドが近くにあったかどうかは、もちろん記憶がない。これは確認する必要があると考え、夏の日差しの戻った6月25日、兎和野を再訪した（図2）。

すでにゴトウヅルの花は盛りを過ぎていて掬っても何も入らない。あたりを見回すとやはりごく近くにナナカマドがあった。11時半ごろ無造作に生葉をスィーピングするとまたヤツボシシロカミキリが2頭入っている（図3,4）。いずれも擦れのない羽脱間近のような個体で、バラの妖精のように美しい。あたりにはこのナナカマドが一叢だけ、枯死部には羽脱孔？らしき痕もある。おそらくこれが発生木なのだろう（図5）。

分布について

ネット上の採集記録や文献によると、採集場所として長野県、岐阜県、福井県、岡山県、鳥取県大山（未確認情報）、中国山地、山口県、対馬等の地名がでてくる。ただし木曾町周辺以外は、いずれも1990年代以前の古い記録で、成虫の採集事例も少ないようだ。

今回氷ノ山から10km程の所で生息が確認されたが、



図2 兎和野高原、ヤツボシシロカミキリ採集地付近の環境。

¹⁾ Kazuo KONISHI 兵庫県西宮市



図3 ヤツボシシロカミキリ.



図4 ヤツボシシロカミキリ.



図5 発生木と思われるナナカマドの枯死部.

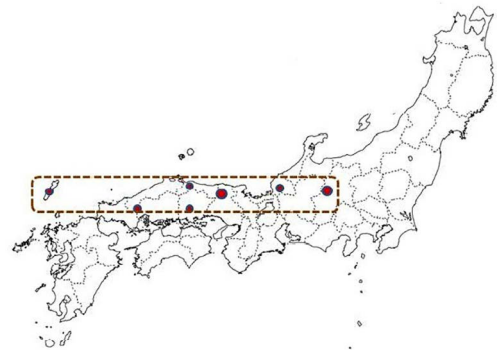


図6 ヤツボシシロカミキリ分布概念図.

この周辺の山や高原、そして隣県の京都北山、丹後あたりでも、ナナカマドの生葉に着目することで新たな発見があるかもしれない。また中国山地でも同じように再発見されれば、これまで局所的で散見・点在するとされてきた本種について、長野から近畿、中国地方にかけてのブナ帯（下部）、さらに対馬へと帯状に連続する分布域を想定することができるように思われる（図6）。

最後に

兔野高原は、時節になればイッシキキモンカミキリがクワの葉上に群舞し、スネケブカヒロコバナカミキリがノリウツギやリョウブの花上をフワフワと輪舞する。バラの妖精・ヤツボシシロカミキリが生息する林内では、青い宝石・ルリボシカミキリが飛び交う光景も見られるだろう。

美しい高原にいつまでもこの貴重な自然が維持されることを祈るばかりである。

参考文献

- 福井県レッドデータブック データベース, ヤツボシシロカミキリ <http://www.erc.pref.fukui.jp/gbank/rdb/rdbdata/ins157.html>
- 福井県のすぐれた自然データベース, ヤツボシシロカミキリ <http://www.erc.pref.fukui.jp/gbank/tokusei/d000e7.html>
- 田中 馨, 1990. ヤツボシシロカミキリ山口県に産す. 昆虫と自然, 25(13): 5-6.
- 山地 治, 1990. 岡山県のカミキリムシ数種の記録・整理. ずむし (倉敷昆虫同好会), 124: 25 - 26.
- 註) 臥牛山は対馬と同様, タカサゴシロカミキリの記録も多い